

小中高校における国際理解教育の概要と課題

—倉敷芸術科学大学留学生へのニーズの分析から—

黒田 明雄

倉敷芸術科学大学留学生別科

(2003年9月30日 受理)

1 はじめに

総合的な学習の時間（以下、総合学習）が、2002（平成14）年度から小中学校に、2003（平成15）年度から高等学校の教育課程に位置付けられた。実際には準備期間を経て実施されている。その結果、多くの学校で、総合学習で国際理解をテーマにした教育実践が行われている。このような教育の動きに連動して、倉敷芸術科学大学（以下、本学）に学ぶ留学生に、地域の学校から国際理解教育の外部講師としての依頼が寄せられている。

今日、総合学習には賛否両論、様々な考えや課題があるが、国際理解教育の推進に否定的な教師はいないであろう。国際理解教育の実践手引書は数多く発刊されているが、繰り返し指摘されていることがある。「小学校、中学校、高等学校における異文化理解教育の授業では、留学生との交流、料理教室、歌、民族衣装の紹介など一過性の課題を取り上げることが多かった。」¹⁾「あまりに総花的な取り組みが多く、結果として教科学習も国際理解教育の学習も中途半端に終わる例が多かった。」²⁾理論面を押さえる必要がある。

筆者は、湾岸戦争や冷戦構造崩壊の当時に、日本人学校に勤務し異文化体験を持った。現在は、留学生教育に携わり、日本に居ながら異文化接触を常日頃しなければならない状況にある。こうしたことから国際理解・異文化理解に関わる理論と実践の諸問題について少なからず関心をもっている。国際理解教育の授業実践の質の向上を目指したい。

本稿では、最初に、日本の国際理解教育の歩みを概観することで、教育現場における国際理解教育の実践の足元を把握する。次に、本学留学生関わった小中高校における国際理解教育の概要を把握し、その考察を試みる。さらに、学習指導案レベルで吟味されていない異文化理解の困難性と文化のとらえ方について言及すると共に教材開発の留意点やポイントを指摘したい。

2 国際理解教育の歩み

1945（昭和20）年、日本は敗戦を契機にユネスコ（国際連合教育科学文化機関）への加盟へ動き始める。「・・・戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない。相互の風習と生活を知らないことは、人類の歴史を通じて世界の諸人民の間に疑惑と不信をおこした共通の原因であり・・・」これはユネスコ憲章の前文であ

る。この格調高い理念は「平和の文化」「共生」という言葉に集約できる。ここに日本の国際理解教育の出発点がある。日本の学校の国際理解教育の方向付けに影響を与えたユネスコの勧告及び中央教育審議会、教育課程審議会、臨時教育審議会（以下、中教審、教課審、臨教審）の答申を振り返ってみよう。

1951（昭和26）年にユネスコへの加盟が認められる。1954（昭和29）年には国内ユネスコ委員会が、国際理解教育の目標を作成している。ユネスコの理念を推進するために、小中高校に協同学校が設けられ、実験的研究が1970年代半ばまで続くことになる。委員会は国際理解教育の啓発活動を試みるが、理念にとどまり具体的な実践まで至らず衰退していく。1974（昭和49）年5月の中教審では「国際性豊かな日本人」の育成が掲げられた。同年11月、パリでのユネスコ総会では、7項目の「国際教育」勧告を打ち出した。「①教育に世界的視点をもたせること②文化、文明、価値、生活様式への理解と尊重③世界的相互依存関係の認識④コミュニケーションする能力⑤権利と義務の認識⑥国際協力への理解⑦地球的規模の問題解決への参加」³⁾これは注目に値する。30年前の勧告であるが、決して錆付いていない。教育政策の指導原則、教育実践上の指針が見事に示されている。

1976（昭和51）年の教課審は、国際化に対応して「国際社会の中に生きる日本人」の育成を掲げ、国際理解教育は足場を海外子女・帰国子女教育に移していくことになる。このあたりから、ユネスコの国際理解教育から多様化の一途をたどり始める。そして、教育現場に開発教育、平和教育、環境教育、人権教育、多文化教育、ワールド・スタディーズ、地球市民教育、グローバル教育などの国際理解教育に関連した教育論が紹介されていく。多様な実践が混在し現在に至っている。

1996（平成8）年にユネスコの21世紀教育国際委員会の報告書は、現代社会の世界化について、以下のように展望している。「①人口過剰の地球②人々の活動のグローバル化③コミュニケーションの普遍化④地球的相互依存の様々な様相⑤不確実性の世界⑥地域的なものと地球的なもの⑦世界理解と他者理解」⁴⁾これは通称「ドロール報告」と呼ばれる。

今日、教育委員会や教育現場のレベルでは、国際理解教育は市民権を得た言葉として用いられている。同時に異文化理解という言葉もよく使われている。包括概念として、ユネスコの勧告から「国際教育」、また、他の視点から「グローバル教育」の呼称を使おうとする研究者もいる。日本の国際理解教育を推進するという視点に立つと、理論整理やカリキュラム整備が大きな課題である。

1996（平成8）年、中教審の答申「国際化と教育」で3つの留意点が記された。一つひとつの文言は、先のユネスコの「国際教育」勧告「ドロール報告」と重なってくる。

- ・ 広い視野を持ち、異文化を理解するとともに、これを尊重する態度や異なる文化を持った人々と共に生きていく資質や能力の育成を図ること。
- ・ 国際理解のためにも、日本人として、また、個人として自己の確立を図ること。
- ・ 国際社会において、相手の立場を尊重しつつ、自分の考えや意思を表現できる基礎的な力

を育成する観点から、外国語能力の基礎や表現力等のコミュニケーション能力の育成を図ること。⁵⁾

この留意点は、国際的な場で仕事に携わる人が掲げる国際人の資質とも重なる。中教審や教課審、臨教審の答申は、学習指導要領の改定を方向付けていくことになる。文部省の教科調査官であった澁澤文隆氏は、「学習指導要領における国際理解・異文化学習は、基本的に次の4つの考え方に立っている。」⁶⁾「学習指導要領の改訂への歩みは国際理解、国際化への対応の歩みである」⁷⁾と述べている。

- ① 国際協力・国際協調の精神など、日本人の自覚をもち、国際社会の中で主体的に生きる資質や能力を育成することをめざし、「公民的資質の基礎を養う」一環として展開する。
- ② 国際理解・異文化理解学習を生涯学習のテーマと位置付け、知識詰め込みに偏らず、学び方を学ぶ学習の充実を図って展開する。
- ③ 諸外国の人々の生活や文化を理解し尊重するとともに、我が国の文化と伝統を大切にすることを育成することを重視して展開する。
- ④ 社会科、英語科を中心に、総合的な学習を含め、教育課程全体で展開する。社会科においても、地理、歴史、公民も各分野、科目で展開する。⁸⁾

この4つの考え方に表れている文言は、社会科の教科目標によく表れている。

今日、国際理解・異文化理解・国際交流・異文化交流を掲げた教育において、ねらいや目標に記されるキーワードは、ユネスコの勧告や各答申、学習指導要領に出てくる文言に源があることは明らかである。日本の国際理解教育は、ユネスコの国際理解教育（実験協同学校の取り組み、ユネスコ勧告以降の国際教育）と1970年代から始まる学習指導要領を基にした国際理解教育に大きく分けられる。今、ユネスコの理念は全国各地に広がるユネスコ協会において生かされ、地域社会の中で様々な取り組みが繰り返されている。並行して、学校教育の中では、多様化をたどりながら国際人の育成を目指して国際理解教育は実施されている。文化理解型の授業にとどまらず、関係発見型の授業や地球的課題を教材化した問題解決型の授業等も行われている。

岡山県では、1992（平成4）年の第19回全国海外子女教育・国際理解教育研究大会を契機に岡山県国際理解研究会の組織の充実が図られ、研究会が定期的に開催されるようになった。日本人学校経験者が中心となった小中学校の国際理解教育の実践から裾野が広がり、多様な実践が積み上げられてきている。1990年に発足した日本国際理解教育学会には、研究者、実践者、NGO関係者等々が集い、理論と実践から日本の国際理解教育のあり方が検討され、研究の積み上げがおこなわれている。

3 小中高校における国際理解教育の概要

1999年度（平成11年）から2002年度（平成14年）の本学留学生の交流記録（留学生室保管）を用いて、地域の小中高校における国際理解教育の概要を把握する。この記録には、依頼書や

学習指導案、児童・生徒の感想、留学生室の担当者と授業者とのやりとり等の資料が残されている。これらの交流記録を整理したのが、表1・2・3・4である。

1) 小中高校の依頼と本学留学生の参加状況

本学に在籍する留学生の数は、平成11年度は約100名である。平成13年度には1年課程の留学生別科が附設され、現在では200名を有に超えている。

平成11年度の場合、延べ96名の留学生が教育現場の要請により参加している。(表1)しかし、実質、参加しているのは全留学生に対して2割約20名程度である。日本語で説明できる能力と人間性等が条件になるので、同じ学生が参加する傾向がある。詳細にみると、授業者の要望により、KA小学校やTM小学校のように、同じ留学生が何度も行っている場合もある。また、民族衣装を着て踊れる留学生や民族楽器を演奏できる留学生など、視聴覚的に異文化を伝えることが可能な留学生が繰り返し参加する様子がみられる。言語や身体的特徴などが異なる出身地の留学生を要望する声は強い。本学はアジアの留学生に限られているが、欧米の留学生を求める声もある。これは他の教育機関に委ねることになり、訪問先の学校によっては、本学留学生と欧米の留学生が同時に授業に臨む場合もある。

表1 平成11年度 小中高校の国際理解教育と留学生の参加状況

訪問日	学期	対象校	学年・人数等	場面	主な学習内容等	出身地	計
1 9・2	2	KA小	4年	総合	「中国の文化を学ぼう」 挨拶、教え方などの説明	中3 (内2) 台1	5
2 10・22	2	KA小	4年	総合	中国の遊びで交流	中3 (内2) 台1	4
3 11・26	2	KA小	4年	総合	餃子作り 給食交流	中4 (内3)	4
4 10・6	2	TM小	5年全クラス	総合	第1回 「アジアの留学生と友達になろう」 迎える会	中6 (内3) タ3	9
5 10・7	2	TM小	5年1クラス	総合	「アジアの留学生と友達になろう」 迎える会	パ1	1
6 10・13	2	TM小	5年3クラス	総合	第2回 文化を題材とした授業	中6 (内3) タ3	9
7 10・15	2	TM小	5年1クラス	総合	文化を題材とした授業	パ1	1
8 10・20	2	TM小	5年3クラス	総合	第3回 文化を題材とした授業	中6 (内3) タ3	9
9 10・21	2	TM小	5年1クラス	総合	文化を題材とした授業	パ1	1
10 10・25	2	TM小	5年4クラス	総合	第4回 歌、文字、料理、モンゴル習字 ※研究授業	中6 (内3) タ3 パ1	10
11 10・28	2	TM小	5年1クラス	総合	第5回 料理作りと交流	中6 (内3) タ3	1
12 10・29	2	TM小	5年3クラス	総合	料理作りと交流	中6 (内3) タ3 パ1	9
13 12・1	2	TM小	5年1クラス	総合	第6回 お礼の会	中4 (内2) 台2	10
14 12・8	2	TM小	1・2年207名	教科	生活科：母語での挨拶、衣食住、日本の印象 触れ合い交流	中4 (内2) 台2	6
15 10・20	2	TM小	6年	総合	「アジアの国ってどんな国」 言葉、遊び、衣食住など 給食交流	中1 (内1) 台1 韓1	3
16 11・10	2	SU小	5年106名	総合	米料理と文化、質問 給食交流	中1 (内1) 台1 韓1	3
17 12・8	2	MA中	2年113名	総合	出身国のこと、日本の印象、質問 文化交流	中2 (内1) パ1	3
18 1・31	3	SH小	6年	総合	第1回 衣食、学校、仕事、遊びなど	中1 (内1)	1
19 2・3	3	SH小	6年	総合	第2回 料理作りと交流	中1 (内1)	1
20 2・9	3	HL小	6年	総合	言葉、生活の様子、遊びなど 一緒に遊ぶ	中3 (内2) 韓1	6
21 2・18	3	TA小	6年	総合	内モンゴルや中国のこと 料理作り	中1 (内1)	1

中 (中国) 内 (中国内モンゴル) 台 (台湾) 韓 (韓国) タ (タイ) パ (バングラディッシュ)

表2 平成12年度 小中高校の国際理解教育と留学生の参加状況

訪問日	学期	対象校	学年・人数等	場面	主な学習内容等	出身地	計
1 6・7	1	KU高	2年	教科	外国事情	中1 (内1)	1
2 6・26	1	KA小	4年43名	総合	第1回 出身国や地域のこと、ゲーム、質問など	中4 (内1) 台2	6
3 10・11	2	KA小	4年	総合	第2回 調べたことの確認、質問など	中4 (内1) 台2	6
4 10・23	2	KA小	4年	総合	第3回 調べ学習発表会 ※研究授業	中4 (内1) 台2	6
5 11・27	2	KA小	4年	総合	第4回 お別れ会	中4 (内1) 台2	6
6 6・30	1	HL小	4年74名	総合	出身国や地域についての質問、ゲームで交流、給食交流	中4 (内1) 台2 韓2	8
7 10・19	2	SU小	3年	総合	「お米から世界をのぞく」 調べ学習発表会 質問 ※他4ヶ国4名	台1 韓1	2
8 10・20	2	HA中	3年	総合	話題で交流 衣食住、習慣、行事など ※他2ヶ国3名	中4 (内1) 台3 韓2	10
9 10・21	2	N 1中	3年	総合	「コンチネンタル」われらみんな地球人 国際交流 異文化目文化理解	中1 (内1) 韓1	2
10 10・26	2	A2中	3年14名	総合	第1回 雲大訪問 大学見学 留学生と交流	中2 (内1) 台1	3
11 11・7	2	A2中	3年70名	総合	第2回 出身国や地域のこと、衣装、料理、歌、踊りなど	中1 台1	2
12 10・27	2	TM小	6年108名	総合	第1回 日本の印象、母語での挨拶 一緒に遊ぶなど	中4 (内2) 台1	5
13 11・17	2	TM小	6年	総合	第2回 留学生と交流会 料理、衣装、歌、踊りなど	中4 (内3) 台1	5
14 11・22	2	TK小	5・6年34名	総合	第1回 出身国や地域のこと、質問	中1 (内1) 台1	2
15 12・6	2	TK小	5・6年	総合	第2回 調べ学習発表会 遊び	中1 (内1) 韓1	3
16 1・17	3	OH小	6年	総合	第1回 「食べ物でのぞいてみよう。…」 文化	中1 (内1) 韓1	3
17 2・16	3	OH小	6年	総合	第2回 日本の伝統料理作り	中1 (内1) 韓1	3
18 2・21	3	HA小	6年97名	教科	社会科「世界の中の日本」 出身国や地域のこと	中2 (内1) 台1 韓1	4

表3 平成13年度 小中高校の国際理解教育と留学生の参加状況

訪問日	学期	対象校	学年・人数等	場面	主な学習内容等	出身地	計
1 4・27	1	TA高	国際科1年66名	教科 専門科目・国際社会「コミュニケーションの方法」	交流体験、質疑応答	中2 (内1) 台1 韓1	4
2 各学期 1・2・3		TA高	国際科2・3生	教科 専門科目・中国語Ⅰ・Ⅱの発音のTTとして	学期に2～3回訪問指導	中1 (内1)	1
3 5・25	1	KA小	全校	行事 本学訪問 縦割班「みづばら探検隊」で学内見学	留学生は案内役	中4 (内) 台2	6
4 10・17	2	KA小	4年32名	総合 第1回 「仲良くなろう」	ゲームやスポーツ交流	中4 (内) 台2	6
5 11・14	2	KA小	4年	総合 第2回 「作ろう食べよう」	料理作り	中4 (内) 台2	6
6 11・27	2	KA小	4年	道徳 第3回 「日本のよさを考えよう」	留学生に自国のよさを聞く	中4 (内) 台2	6
7 12・12	2	KA小	4年	総合 第4回	日本・地域のよいところ紹介 よいとこカルタ大会	中4 (内) 台2	5
8 6・	1	KT高	国際文化系2年41名	教科 外国事情	中国の文化、高校生の生活など、質問	中1 (内1)	1
9 6・13	1	MT小	5・6年	総合 自然、遊び、行事、衣食、学校、言葉、違いなど		中1 (内1) 台1 韓1	3
10 9・29	2	SN中	1年266名	総合 異文化交流 民族衣装、歌、踊、食文化など、質問		中1 台1 韓1	3
11 10・11	2	KO高	2年49名	総合 「生き方・進路」 本学訪問 大学見学 留学生と交流		中2 (内1) 韓1	3
12 11・8	2	KO高	全校	総合 講演「外国から見た日本」		中1 (内1) 韓1	2
13 11・14	2	OT小	1年83名	教科 生活科「触れ合う」遊び、国のことなど、質問、遊びやゲーム		中1 (内1) 台2 韓1	4
14 11・14	2	TS小	6年49名	総合 第1回「触れ合おう、外国と日本」	料理作り、遊びや言葉	中4 (内1) 台1	6
15 11・28	2	TS小	全校・保護者	行事 学芸会で演奏		台1	1
16 2・12	3	TS小	6年	総合 第2回 料理作り 文化紹介		中3 (内1) 台1	4
17 11・17	2	SO中	3年171名	総合 「グローバルを目指そう」 台湾のこと		台1	1
18 11・28	2	TK小	5・6年35名	総合 第1回「留学生と仲良くなろう」	自己紹介など	中4 (内1) 台1	5
19 12・12	2	TK小	5・6年	総合 第2回 交流活動 相互理解		中4 (内1) 台1	5
20 11・28	2	HU小	6年64名	総合 第1回 台湾のこと、遊びなど、質問、地域の紹介、日本の遊びで交流		台1	1
21 12・5	2	HU小	6年	総合 第2回 調べ学習発表、お茶会、質問		台1	1
22 12・17	2	NA小	2年121名	教科 国語「スーホーの白い馬」物語	自然や草原の生活	中1 (内1)	1
23 2・13	3	OH小	6年	総合 衣食住、学校生活、遊びなど		中1 韓1	2

表4 平成14年度 小中高校の国際理解教育と留学生の参加状況

訪問日	学期	対象校	学年・人数等	場面	主な学習内容等	出身地	計
1 4・26	1	TA高	国際科1年65名	教科 専門科目・国際社会「コミュニケーションの方法」	交流体験、質疑応答	中2 (内1) 台1	3
2 7・10	1	KA小	4年40名	総合 第1回 「留学生と仲良くなろう」	自己紹介 ゲーム 質問	中5 (内) 台1	6
3 10・23	2	KA小	4年	総合 第2回 「外国のことを知ろう」	日本の遊び 中国の遊び	中5 (内) 台1	6
4 11・末	2	KA小	4年	総合 第3回 「料理を教えてもらおう」	料理作り	中5 (内) 台1	6
5 9・17	2	UW小	6年	総合 第1回 「知ろう中国・伝えよう日本」	交流会	中2	2
6 10・8	2	UW小	6年	総合 第2回 中国の調べ学習発表会 衣食、言語、遊び、三国志など		中2	2
7 11・26	2	UW小	6年	総合 第3回 日本文化を伝える会		中2	2
8 10・7	2	H 1中	3年全クラス	総合 食文化、民族衣装、言語、民族楽器、比較文化など ※参観日		中5 (内) 台3	12
9 10・28	2	NA小	6年124人・保護者	総合 4クラス 国際理解 3時間 歓迎会 交流会、質問 お別れ会		中4 (内3) 台1	5
10 11・7	2	KU高	全校	総合 講演「外国から見た日本」		中1 台1 韓1	3
11 1・13	3	KZ高	1・2年国際コース	教科 生活文化、行事、学校生活、若者文化など		中1 台1	2
12 2・13	3	OH小	6年	総合 衣食住、学校生活、遊びなど		中2 台1	3
13 2・14	3	TO中	3年	総合 質問、交流など		中3 (内2) 台1	4

平成11年度の場合、出身国や地域は中国（内モンゴルを含む）、台湾、韓国、タイ、バンラディシユであるが、平成12年度からは中国（内モンゴルを含む）、台湾、韓国となっている。（表2・3・4）異文化発信力のある留学生は、1年から頼まれる傾向にある。大学院や留学生別科で学ぶ留学生も少数ながら参加している。平成14年度の場合、本学の全留学生約230名に対して、延べ56名の参加である。（表4）実質は、全留学生に対して1割弱約20名が参加している。大雑把な言い方をすれば、毎年、約20名の留学生が、留学生室を通して小中高校の授業に派遣されていることになる。

参加延べ人数と学校別内訳をみてみよう。平成11年度延べ人数96名（内訳：小93名、中3名）、平成12年度延べ人数76名（内訳：小58名、中17名、高1名）、平成13年度延べ人数80名（内訳：小61名、中4名、高15名）、平成14年度延べ人数56名（内訳：小32名、中16名、高8名）となっている。留学生にとっては、日本の教育事情を知るとともに、自（国）文化発信をする機会となっている。

2) 小中高校における国際理解教育の概要 ～留学生の授業参加場面から～

留学生はゲストティチャーとして授業の大切な役割を担う存在である。教育課程のどんな場面に参加して、どんな役割を果たしているかをみてみよう。

小学校の場合は、4・5・6年生の総合学習に関わっている場合が大半である。国際理解の

テーマを要約すれば「文化を学ぼう」「どんな国だろう」「交流しよう」「友達になろう」等である。総合学習に関連させて、5年生の社会科単元「食生活と農業」や6年生の社会科単元「世界の中の日本」、4年生の道徳「日本のよさを考えよう」で実施している場合もある。1・2年生では「ふれあい」をテーマにした生活科である。2年生の国語の物語「スーホーの白い馬」で、留学生が内モンゴルの草原の様子を語っている場合もある。

中学校の場合は、1年生と3年生の総合学習に参加している。国際理解だけが総合学習の課題でないが、中学校は小学校に比べてより制約が多いためか、留学生のニーズは少ない。高校の場合は、教科「外国事情」「国際社会」や総合学習「外国から見た日本」(講演)で需要がある。

学習形態をみてみよう。教室に1人の留学生が入る場合と複数入る場合もある。体育館で、文化の説明や質疑応答、演奏や踊りによる文化紹介、交流会が行われることもある。小学校では、調理室で料理作りを通じた交流も見られる。

基本的な学習内容には、小学校、中学校、高校ともほぼ共通したものがみられる。留学生に求められる内容及び留学生の話は、おおむね以下の通りである。

- | | |
|----------------------------|----------------------|
| ①自己紹介(家族、大学での勉強等) | ②出身国や地域の説明(自然、名所等) |
| ③衣食住についての説明(生活の様子) | ④学校や勉強、学生様の説明 |
| ⑤遊び・行事・流行・習慣の説明 | ⑥日本と違うところの説明 |
| ⑦簡単な会話や言葉を教えること | ⑧調べ学習の成果を聞いてコメントすること |
| ⑨質問に答えること(質疑応答) | ⑩出身地の遊びを教え一緒に遊ぶこと |
| ⑪日本の遊びやゲーム、スポーツを一緒にすること | |
| ⑫歌を歌ったり、音楽を流したりして民族衣装で踊ること | |
| ⑬民族楽器を演奏すること | ⑭料理を一緒に作ること |
| ⑮給食を一緒に食べること | ⑯中国語の発音補助 等 |

これらを整理すると、留学生が説明する時間、質疑応答の時間、料理・舞踊・楽器での文化紹介の時間、体験的な交流時間、給食交流の時間等に分類できる。一般的にどの学年段階でもみられるのは、文化の説明と質疑応答である。多くの実践は、「文化紹介をしてください。」「質問に答えてください。」「違うところを教えてください。」にとどまっている。児童や生徒は、外国人と直接会えたことで嬉しさや満足感はあるかも知れない。しかし、結果的には総花的な授業にならざるを得ない。また、ステレオタイプ的な見方を助長しやすい傾向もある。

これらの原因として3点を指摘したい。一つ目は非常に限られた時間内に様々な文化を紹介しようとするため事象の羅列になりやすい点である。単発的イベントと言われる所以である。二つ目は留学生自身が自(国)文化の背景について深く考えたことがない点である。何度も小中高校の授業に招かれて話をした数名の留学生に、「何をいつも話しているか。どんな質問を受けるか。」と尋ねてみた。その話の内容から、自(国)文化の背景を意識して話している様子はあまりみられなかった。留学生の持ち味を引き出すために、事前指導ができれば学習効果

もより期待できよう。文化を伝える際のアドバイスの必要性を感じる。三つ目は授業者自身が追求したい文化、追求させたい文化をもっているか否かという点である。佐藤学氏は『『総合学習』に対して混乱する教師は、教師自身が子どもと追求したいリアルなテーマや内容を持っていないのである。これまでも子どもと追求したいリアルなテーマや内容を持っている教師は、文部省が『総合学習』を提起しようとしまいと・・・『総合学習』の実践を展開し続けてきた。』⁹⁾と厳しい指摘をしている。ある文化に興味・関心を持ち、歴史をたどり背景を様々な文脈でさぐるようとする授業者の学びの姿勢は、児童や生徒の「はてな」「なぜ」に結びつくものである。

高校の総合学習「外国から見た日本」(講演)を取り上げてみよう。台湾、韓国、中国の3人留学生が、それぞれの経験をもとに、日本の印象や自分の国や地域の文化について話している。8人の高校生の感想から、彼らの学んだことを抜き出してみたい。

台湾の留学生の話から

- ・日本人より外国人の方が日本人らしい
- ・日本の生活は外国から見れば結構自由
- ・台湾には四季がないことが分かった
- ・秋の紅葉が楽しめない
- ・日本の食べ物は台湾の食べ物と似ている
- ・バイクに4人乗りをしてよい

韓国の留学生の話から

- ・パソコンの技術は日本が遅れている
- ・高校生は朝7時から夜11時まで勉強する
- ・韓国では茶髪やピアスの高校生はいない

中国の留学生の話から

- ・中国では結婚は24歳です 日本と同じ
- ・中国では大人はマンガをあまり読まない

このようなことは、小学校や中学校にもみられる。事実かどうか確認する姿勢がほしい。一留学生の話を鵜呑みにしてしまい、ステレオタイプの見方や二項対立的な見方をもちやすい。この問題を改善したい。

肯定的に評価できる面もある。8人の高校生の感想にみられるプラスの面を要約してみよう。書物の世界の知識でなく留学生を招いての体験的学習から出た声は意味がある。

- ・自分達が普段気付かない所を外国の人はよく見ている
- ・国が違えば言葉だけでなく見方も考え方も大きな違いがある
- ・韓国の人はみな家庭で作ると思っていたが、キムチが苦手だと聞いてビックリした
- ・着物に興味を持っていると聞いて、日本の文化を大切にしなければならないと思った
- ・日本には選択肢があることを聞いて自分の将来をちゃんと考えなければと思った

日本を好きになれなかった韓国の留学生が、ホームステイの経験を契機に日本への留学を決めている。この留学生の話は、ある生徒には、自分自身の生き方を振り返らせることになっている。留学生自身は、日本という異文化社会の中で、葛藤しながら異文化適応過程を歩んでいる。そして、児童や生徒の前に立っている。総合学習であれば先の韓国の留学生の受けてきた

教育や心の動きにもっと焦点を当てれば、人間理解の学習に発展するだろう。留学生が日本の生活で感じる違いや違和感等を話題にすれば、互いの自明の規範・価値観・習慣等に触れることになる。留学生が指摘する違いの具体事例として、割り勘、お礼の言い方、お客の招待の仕方、友人関係、教師への言葉遣い、電車内の様子等がある。生活に密着した文化を共通話題にすれば、社会規範の違いが表れやすい。国や地域についての羅列的知識の習得に終わらないために、短時間の授業であっても文化の背景に目を向けたい。カルチャーショックを聞き出し、授業に生かすために早目の事前打ち合わせが必要であろう。授業者の目のつけどころによって、授業の方向が異なってくる。

国際理解教育の推進のためには、提案性の高い授業実践が求められる。授業者自身に異文化体験があることはよいことではある。それに加えて、自（国）文化と他（国）文化への知的好奇心と教材開発の意気込みが不可欠である。総花的で中途半端に終わらないようにするためには、先行研究の成果に依拠しつつ、理論と実践の整合性を自問自答する姿勢が強く求められる。また、総合学習と社会科（総合学習と関わる教科）の役割を明確にして、より意図的計画的に授業に臨むことも必要であろう。

4 文化に関わる諸問題

総合学習であれ教科学習であれ、異文化を取り上げた国際理解教育の実践は多い。国際理解教育は異文化理解教育の授業とも言えよう。ある目標を提示しよう。「外国の人と交流により、日本文化を見直したり文化の相違を理解したり、コミュニケーション能力や共生意識を・・・」このような目標はよくみられる。しかし、実践の具体的な学習内容をみると、文化という言葉が吟味されないままに使われている感がある。視点を明確にした授業を構想するために、異文化理解の難しさや曖昧な文化という言葉について論じる。さらに、教材開発に必要な留意点を指摘したい。

まず始めに、異文化理解の困難性について言及しよう。かつて、比較文化研究に長年取り組んだ渡辺文夫氏は「文化というのは、人間にとってかなり深いもので、その研究には、慎重さと視野の広さを持ち取り組まなければならない」¹⁰⁾と述べている。外国の文化を理解するのは容易でないという指摘である。外国人労働者問題に明るい梶田孝道氏は、「これまで日本社会は、多民族の共存を前提とすることなく、暗黙の前提として存在する日本語、日本的規範、日本的な能力判断などに基づいて維持されてきた。しかし、公式、非公式に言語や文化を異にする多くの外国人が日本で生活するようになり、これまでの暗黙の前提とされてきた文化規範、民族規範が新たに問題にされるに至っている。同じ肌の色をし、日本語を話し、日本的な意思決定に慣れてきた人々の間では自然であったことが、それとは異なる文化的・民族的背景をもった人々にとっては、必ずしも『自然』ではなくなる」¹¹⁾と文化摩擦の問題を指摘している。互いの自明の文化は空気のようなもので意識しにくい、異文化接触により規範・価値観・常識を背負った人と人との衝突が起こる。これから、児童や生徒の生きる時代は、確実に異文化

との接触を避けて通れない時代になる。目に見えない異文化の理解、異文化を背負う人の理解は容易でないが、それらの学習の必要性は学校教育にとどまらず、職場や地域社会でも増していくだろう。

文化人類学者の関本照夫氏の異文化理解の話に耳を傾けたい。多少長くなるが引用しよう。「異文化理解ということ、いろいろな広い文脈に位置付けて考えていこうとすると、ものごとの姿は明快になるより、むしろ不安定になっていくということです。このことを私は肯定的に考えています。相手と自分とが異なる脈絡ごとに異なる顔を持つ不確定なものになっていき、たえず疑問が広がっていくのが異文化理解だと思っています。」¹²⁾「接触が深まれば、相手への知識がふえるがためにむしろ相互の違和感が累積していく機会も増えます。個人の経験の中から自分の自然な好き嫌いの感覚を対象化し、分析し、相手を分析していくことをたえず続けていき、永久にものごとを考えていくのが、異文化の問題だと、私は考えているわけです。」¹³⁾「異文化理解にすぐに使える手引書や解答書はありません。それは、人がたえず新しい経験に立ち向かいながら、たえず新しいものごとのありさまを考え直していく永久の運動の契機だといえるでしょう。」¹⁴⁾ここには異文化理解の難しさと同時に、異文化理解への重要な姿勢が表れている。

藤巻正巳氏は異文化研究の要件の中で、分厚い文化に立ち向かう態度を、次のように述べている。「真に異文化を理解しようとするならば、たとえ、ある特定の文化事象やそれらを成り立たせている政治的・社会的・歴史的・地理的背景にも考察する眼を広げ、深めて行こうとする、つまり、相手文化、相手社会を『丸ごと』知ろうとする態度が求められる」¹⁵⁾この態度は、社会科の教材開発に通じるものであり、示唆に富む指摘である。

祖父江孝男氏は文化人類学が国際理解へ寄与することを、次のように述べている。「さまざまな異なった環境に置かれて、いろいろと多様な変異を示す文化と社会を互いに比較することにより、はじめて人間と文化の法則性を把握することが可能になるのである。法則性などといったレベルにまで行かなくても、同じ人間ながら『所変わればヒト変わる。』—その慣習や行動と考え方の様式は文化によっていかに違うのかということを知ること自体が現在、世界的にその必要性を要請されている『国際理解』とか『国際コミュニケーション』などといったことを達成するのに絶対必要な要因となってくる」¹⁶⁾今後、文化人類学の研究成果を社会科授業に組み込んだ教科書記述や教材開発は課題である。

次に、文化のとらえ方について言及しよう。これは文化人類学者にタイラーに遡る。タイラーの古典的定義は「知識、信仰、芸術、道徳、法律、慣習その他、社会の成員としての人間によって獲得されたあらゆる能力や習慣を含む複合総体」¹⁷⁾である。これはあまりに包括的である。今日では、文化についての様々なとらえ方が存在している。

では、総合学習なり教科学習なりで、どのような考え方をすればよいのであろうか。星村平和氏は「中学校の社会科学学習をすすめるに当たっては、表層文化と基層文化に分けて考えてみるのが適切であろう。」¹⁸⁾と述べている。前者は、いわゆる伝統文化（上層文化、高級文化）

で、お茶やお花、歌舞伎、能、浮世絵、俳句、相撲、芸術、学問、思想、宗教などが該当する。誰もが学校で習って知っているが、言葉を知っている程度にとどまっていた、ほとんど異文化の領域に等しい。後者は、一般に生活文化（日常文化、基層文化、基底文化）で、遊び、行事、料理・衣服・住居や流行、衣食住の生活様式、表情、言い方、行動様式、時間感覚、人間関係、礼儀作法、規則、マナー、価値観、規範、風習などを含む。形あるものから暗黙知の文化まで幅広い。伝統文化と生活文化というとらえ方のほかに、見える文化（物理的文化、顕在文化）と見えない文化（観念的文化、隠在文化）でとらえる場合もある。見える文化は、五感に訴えることができる文化で無数にある。見えない文化は規範、価値観、習慣等である。生まれたときから様々な場や集団で学習して頭の中に常識として自明のものになっている部分である。説明がつきにくい本音と建前、ウチとソト、集団思考、曖昧性、以心伝心などの日本人の特性も見えない文化と言えよう。形としてつかみにくいものである。これは異文化を背景にもつ人には分かりにくい文化であり、大方の日本人にとっても説明しにくい文化である。異文化を鏡として、自国の歴史や宗教、日本文化の特性を学ぶ努力なくしては、説明ができない問題である。

AMDAの菅波茂氏は国際緊急医療活動の現場経験から、ものの見方や考え方の異なる人々を理解し信頼関係を築いていくためには、「宗教、歴史、共同体」への理解が不可欠である指摘している。¹⁹⁾ 発展途上国の現場に立って、現地の人々と交わった経験に裏付けされた実感から出た大変示唆に富む指摘である。日本の教育で不十分なのは、文化の背景に関する歴史的知識と宗教的知識に対する教育である。特に、社会科教科書の宗教的知識の記述は量も質も微々たるものである。日常生活に表れる諸々の宗教を社会的現象ととらえ教材開発していくことは、今後の課題である。

エズラ・F・ヴォーゲル氏は、日本人が国際社会で評価を受けない理由として、異文化との接触体験を養成しようとししない教育制度や討論能力等を指摘している。²⁰⁾ この意味でも学校教育において、意図的計画的に異文化を背景にもつ人々との異文化接触の機会を設けることは極めて意味のあることだと考える。国際人を育てる国際理解教育には、異文化接触の経験は不可欠である。総合学習や社会科において、異文化や生活文化のどの部分をどのように教材化していくかが課題である。ポイントは実践者自身が、取り上げたい文化を様々な文脈と関連させて、因果的に説明できるかどうかである。

5 おわりに

自他・自文化異文化への理解と尊重の精神、国際的対話能力を備えた人間を育てる教育は重要である。未来の日本を担う国際人を育てること、これが正に、国際理解教育の目的なのである。同時に、国際理解教育においても「人格の形成」（教育基本法第1条）を目指していることを忘れてはいけない。世界の厳しい現実を目を向けた時、じっとして共に生きる社会が築かれるものではない。21世紀はアジアの時代である。アジアの留学生を授業に招くことは大変意味のあることである。

本稿では、日本の国際理解教育の歩みを概観した。本学留学生が関わった小中高校の国際理解教育の実践を考察した。その結果、自明の規範や価値観など見えない文化を取り上げることの必要性を指摘した。さらに、異文化理解の難しさと文化のとらえ方に言及し、異文化の教材化のポイントを指摘した。

注及び引用文献

- 1) 久保田真弓・小池浩子・特井厚子「インターネットを利用した異文化理解教育」『異文化間教育17』, 異文化間教育学会, 2003, 38頁。
- 2) 佐藤郡衛『国際理解教育 一多文化共生社会の学校づくり』明石書店, 2001, 47頁。
- 3) 川端末人「国際理解教育とは何か」川端末人・多田孝志編著『世界に子どもをひらく 一国際理解教育の実証的研究一』創友社, 1990, 14-15頁を参考。
- 4) 国立教育会館 社会教育研修所『国際化に関する学習のすすめ方』ぎょうせい, 2000, 5頁。
- 5) 文部科学省『国際理解教育指導事例集 小学校編』東洋館出版社, 2002, 149頁。
- 6) 澁澤文隆『学習指導要領の国際理解・異文化理解学習』『社会科教育2月号』明示図書, 2002, 53頁。
- 7) 澁澤, 前掲書6), 51頁。
- 8) 澁澤, 前掲書6), 53頁。
- 9) 佐藤学『授業を変える 学校が変わる』小学館, 2000, 132頁。
- 10) 渡辺文夫『異文化と関わる心理学』サイエンス社, 2002, 79頁。
- 11) 梶田孝道『外国人労働者と日本』に本放送出版協会, 2001, 123頁。
- 12) 関本照夫「文化の違いを見る目の違い」『異文化への理解』東京大学出版会, 2001, 159頁。
- 13) 関本, 前掲書12), 160頁。
- 14) 関本, 前掲書12), 167頁。
- 15) 藤巻正巳『異文化研究の進め方』『異文化を「知る」ための方法』古今書院, 1988, 5頁。
- 16) 祖父江孝男『文化人類学入門』中公新書, 1996, 236-237頁。
- 17) 吉田禎吾「文化」石川常吉他6名編著『文化人類学事典』弘文堂, 1992, 666-667頁を参考。
- 18) 星村平和「人間・文化・風土」平田・星村・溝上編著『社会科課題学習の新展開』三晃書房, 1987, 6頁。
- 19) 国際教育フォーラムのシンポジウム「国際教育の理念と実践」のパネリストとして菅波茂氏が語った内容, ノートルダム清心女子大学, 2003.9.28。
- 20) エズラ・F・ヴォーゲル/福島範昌訳『Japan as No.1? / ジャパンアズナンバーワン 一それからどうなった』たちばな出版, 2000, 3頁。

参考文献

- 岩田一彦「景観地域思想における国際理解教育の特質 一国際理解教育前史の研究一『兵庫教育大学研究紀要』1984。
- 教職研修総合特集『国際化教育読本』教育開発研究所, 1988。
- 異文化間教育学会編『異文化間教育』特集異文化間教育と国際理解, アカデミア出版会, 1988。
- 島久代・増田茂編著『教室からの国際化 下巻』中教出版, 1991。
- 教職研修総合特集『異文化理解教育読本』教育開発研究所, 1994。
- 野口昇『ユネスコ50年の歩みと展望』シングルカット社, 1996。
- G・ホフステード/岩井紀子・岩井八郎訳『Cultures and Organizations 一Software of the mind/多文化世界 一違いを学び共存への道を探る』夕斐閣, 1996。
- 佐藤郡衛編『国際理解教育の考え方・進め方』教育開発研究所, 1997。
- 宮原修編著『国際人を育てる』ぎょうせい, 1998。
- 光田明正『「国際化」とは何か』玉川大学出版部, 1999。

- 岡本薫『国際交流・国際理解教育のための国際化対応の重要ポイント』全日本社会教育連合会, 1999。
- 大隈和雄『日本の文化の思想』放送大学教育振興会, 1999。
- ジェームズ・A・バンクス／平沢安政訳『AN INTRODUCTION TO MULTICLTLURAL EDUCATION／入門多文化教育 ―新しい時代の学校づくり』明石書店, 1999。
- 奥住忠久『共生の時代を拓く国際理解教育』黎明書房, 2000。
- 佐野正之・水落一朗・鈴木龍一『異文化理解のストラテジー ―50の文化的トピックを視点にして』大修館書店, 2000。
- 水越敏行・田中博之編著『新しい国際理解教育を創造する ―子どもがひらく異文化コミュニケーション―』ミネルヴィア書房, 2000。
- 青木保『異文化理解』岩波書店, 2001。
- 飛田良文編『異文化接触論』おうふう, 2001。
- 大津和子『国際理解教育 ―地球市民を育てる授業と構想』国土社, 2002。
- 河合隼雄・石井米雄『日本人とグローバリゼーション』講談社, 2002。
- 住原則也・箭内匡・芹澤知広『異文化の学びかた・描きかた』世界思想社, 2002。
- 馬渕仁『「異文化理解」のディスコース ―文化本質主義の落とし穴』京都大学学術出版会, 2002。
- 八代京子・町恵理子・小池浩子・磯貝友子『異文化トレーニング ―ボーダレス社会を生きる』三修社, 2002。

Overview and Problems of International Education in Elementary, Junior High and High Schools — From Analyses of Needs for Foreign Students in Kurashiki University of Science and the Arts —

Akio KURODA

Courses in Japanese Studies for Students from Overseas

Kurashiki University of Science and the Arts,

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan

(Received September 30, 2003)

It is very important to educate people who can understand and respect each other, with good communications skills. It is in other words, to bring up people who lead the Japan of the future. Furthermore, it is the purpose of international education. It is said that 21st century is the era of Asia. It is very meaningful that elementary, junior high and high schools invite Asian students studying in Japan to their lessons as a part of their integrated study.

In this paper a history of international education in Japan will be overviewed at first. Then, what elementary, junior high and high schools expect of the foreign students of my university will be surveyed. Through this, the necessity of invisible cultural backgrounds, such as self-evident criteria and sense of value, will be pointed out. The difficulty of understanding foreign cultures will also be specified. It is worth considering how to grasp their cultures.